

# 退院調整を意識したPDルームの活用

キーワード：腹膜透析 退院調整 PD ルーム

所属：C棟7階

○坂口佳子、福本智美、増田加奈子、阪本 芙美、森田冴子

## I. はじめに

当院では腹膜透析（腹腔内にチューブを留置し、自己の腹膜を介して血液中の余分な水分や老廃物が透析液側に移動する。その老廃物や水分を含んだ透析液を身体の外に出すことで血液を浄化する。以下PD）を年間約10名程度、導入している。

PDは早朝・夜間に関わらずバック交換を施行する。そのため、透析液の袋の開封音や、UVフラッシュ（無菌でバック交換の操作を行う器械）の機械音、PD中は空調を止めなければならないため大部屋でPDをおこなう場合、気を遣われる患者が多いことが当院の先行研究であきらかになりました。

そこで、当院では平成20年度から病棟内にPDルームを設置し、先行研究結果より病棟内にPDルームを設置することの有用性が示唆されました。

今回われわれはPDルーム活用の継続研究として、退院後の生活を想定し環境・モノに着目し、医療備品ではなく実際に使用できる備品を準備し、退院支援に向けた活動の検討を行いました。

## II. 目的

退院後の生活を見据えて継続可能な医療を入院中に組み立てることができる

## III. 研究方法・倫理的配慮・対象

### 方法

- ・半構成的面接、インタビュー

### 倫理的配慮

- ・説明文と同意文書を作成し紙面と口頭で同意を得た上でインタビューを開始した
- ・プライバシーや倫理的配慮に基づき個室でおこなうことを紙面と口頭で説明した

### 対象

- ・65歳以上
- ・ADL自立している
- ・PD歴2年以内
- ・PD導入時PDルームを使用されていた当科通院中の協力の得られたPD患者

## IV. 結果

	物品購入	誰が準備したか	いつ準備したか
A氏	ホームセンター	夫	入院中
B氏	医療備品業者	娘	入院中
C氏	作成	娘	入院中
D氏	作成	夫	入院中

図1 物品購入場所、いつ誰が準備したか

いずれも面会に来ていた家族が、PD導入と共に退院後実施できるように、準備されていた。

## V. 考察

退院支援とは患者が自分の病気や障害を理解し、退院後も継続が必要な医療や看護を受けながらどこまで療養するか、どのような生活を送るかを自己決定する支援といわれている。

また、退院調整とは患者の自己決定を実現するために、患者・家族の意向を踏まえて環境・ヒト・モノを社会保障制度や社会資源をつなぐなど、マネジメントする過程といわれている。効果的に退院支援・退院調整を進めるためには、入院から退院までを3つの段階に分けて進めることも推奨されている。

第1段階は退院支援が必要な患者の把握とされ

ており、PD患者においては外来通院時、保存期から始まっていると考えられる。第2段階として、患者・家族の退院への自己決定支援とされており、PD患者においては療法選択・PD導入時において退院支援にあたる考えられる。第3段階として“生活の場”に帰るPD患者にとっては退院調整が必要であると考えられる。

結果より整理後のPDルームをみることで、自宅に帰られたときから不安なくPDが実施できることが確認できたと考える。また、退院後のPD実施における準備は、家人によっておこなわれていた現状より、PDは本人だけではなく家人への働きかけが重要であることが再確認できたと考える。

病院内には医療、看護、介護を提供する人・物・環境が整っている。そのどれもが、退院後の自宅にはないものである。また、病院において患者はどうしても受け身になりがちであり、病気を自分のこととして主体的にとらえる環境とは言いがたい。退院後の自宅は生活の場であり、重要なのは、「生活の場で継続可能な医療」を入院中に組み立てる、という考え方である。生活の場に戻るとき、「在宅で継続できるのか」という視点から病院と在宅の間のギャップを埋めることで退院支援につながるのではないかと考える。

## VI. 結語

退院支援を意識し、整理後のPDルームを活用・参考にすることで、自宅に帰られたときから不安なくPDが実施できることが確認できた。

### 引用参考文献

- 1) 宇都宮宏子：退院支援のプロセスを学ぼう、看護学雑誌 P6-P28 2010/5
- 2) 任和子、宇都宮宏子、藤田めづる、浅田摩紀：退院支援に看護の原点が見える